
ブラン・ド・ノワール

不二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブラン・ド・ノワール

【Nコード】

N2281W

【作者名】

不二

【あらすじ】

時は15世紀後半暗黒時代。南フランスの片田舎に一匹の吸血鬼が住んでいた。それは、何度死んでも滅びない、はた迷惑な麗人シヤルロ・ド・ユニヴェール。ある日、彼にラングドック地域の町々を襲う吸血鬼集団の首領「ブラン・ド・ノワール」を仲間に引き入れると上司命令が下り――。ローテンションな灰色メイドを従えて、ゴシック・バロックにお送りする中世吸血鬼物語。（自サイト掲載シリーズの番外です）

序

「ユニヴェール様、お手紙です。……そんなに本を散らかして、何かお探しですか？」

「エメラルド・タブレット」

「錬金術の本を？ また何故です？」

「庭の薔薇の葉に黒い斑点が！」

「まず斑点が出た葉を取り除く方が先です」

「……………」

「それよりも、暗黒都市の女王陛下からお手紙が参りました。足の踏み場がないので投げてよろしいですか？」

「許す」

「では」

「パルティータ！ 縦に投げる奴があるか！」

「横投げは正確に飛ばすのが案外難しいのです。それで、陛下は何と？」

「……………。城へご招待くださるそうだ」

「ああ、呼び出しですね」

「何か祝い事でもあるのか……」

「また何か怒られるようなことをしたんですね」

「お前は自分の主を何だと思ってるんだ。これからすぐに城へ行くから馬車を呼べ。それからこの部屋を——」

「ご自分の部屋はご自分で片付けてください」

「お前、自分の職業を知っているか？ メイドだ、メイド。小間使い」

「自分が撒いた種は自分で刈る。まっとうな人間としての生き方を母君に教わりませんでしたか？」

「私はもう人間じゃない」

「それは屁理屈といえます」

「ではお前の仕事は一体何なんだ！ 何だったらやるのだ？」
「お出かけになる前に紅茶を淹れて差し上げます」
「……………」

——世界は神の箱庭か、その吸血鬼の劇場か。

冷笑主義・出張編

「ブラン・ド・ノワール」

先の見えない濃密な闇が南フランスの森を覆い尽くしていた。

新月の夜、流れる雲の影はなく、ヨタカも鳴くことを忘れ、獣が
落ち葉を踏む足音さえない。

木々の隙間から滲み出した黒い夜気は山間の小さな村々を飲み込
み、ふもとの街々を包み込み、もはや世界は人の手にはなかった。

滑空する蝙蝠^{コウモリ}、実体のない蹄^{ひづめ}の音、風を渡る気配。

大地の湿気と蓄積された熱がゆっくり混じり合い、そろりそろり
と夏へ近付いてゆく。

昼間の喧騒が霧散した生命の静寂。

墓場の下の蠢き。

人ならぬ者たちの息吹は森を抜け、田畑を横切り、城砦を越え—
|。

「誰か！ 誰か！」

かろうじて意味を成す悲鳴が夜を裂いた。

周囲を山と葡萄畑^{ブドウ}に囲まれたなだらかな街に、恐怖を報せる下女
の声が反響する。

彼女が見たものは、寝台を紅に染め横たわる女主人の姿だった。
叫んでから、ランタンを握り締めた下女は部屋の入り口で硬直し

た。

女主人の部屋にいた見知らぬ男が——どこにでもいる中肉中背、着古した身なりの男が、こちらを振り返りもせずに窓から飛び降り逃げて行ったのだ。

ここは二階だというのに！

「……………」

女主人の目を見開いた血の気ない顔見れば、もはや息がないのは明らかだ。

しかし主人の様子を伺うまでもなく、彼女は何が起こっているのか分かっていた。

とうとうこの街に順番がまわってきたのだ。

彼女は足をひきずり、震える手を叱咤しながら窓に寄った。突然高熱に冒されたように身体の節々が軋み、どうにか己の動きを止めようとしている。地上にわだかまっていた熱がすべて消えてしまったように、寒い。今自分を支配しようとしているものが本能なのか恐怖なのか、彼女には分からなかった。

しかしそのどちらでもない何か彼女を窓へと駆り立てたのだ。

「主よ、どうか慈悲をお与えください。主よ、どうか、どうか我らに慈悲を」

彼女が見下ろした街の通りには、いくつもの黒い人影があった。目を凝らせば人のようではあるが、あちこちの窓から飛び降りてきたその者たちは、いとも簡単に着地をすると痛みがもうずくまりもせず悠然と歩き始めるのだ。

時折失敗した者は、曲がった足首を自分で元に戻して何事もなく流れの中に混じってゆく。

人の形をした、人ではないもの。

蜘蛛の子が集まるように、その数は次第に増えてゆく。

あまりのおぞましさに彼女が口元に手を当てたと同時、街のあちこちで悲鳴が上がり、塗り潰された闇にぼつぽつと火が灯され始めた。

すると、

「引き上げるぞ！」

通りに群れていた異形たちを割って、鉾^{ひょう}を打った白い外套を羽織った男が現れた。

硬質の光を放つ金髪に、紅の三白眼。

厳格な騎士とも無法な傭兵ともとれる蒼白い顔つきは、照燈^{テアロ}の赤い灯が燃やされ始めた夜によく映える。

「……ブラン・ド・ノワール」

それがその化け物に付けられた呼び名だった。

^{ノワールブラン}黒の白。白をまとった魔物。だがどれだけ装おうが魔物は魔物。黒は黒。

彼が街を見まわす視線は、敵意と怒りが入り混じりひどく鋭利で重い。

黒の群集の目が自身に向いていることを確認した男は無言で外套を翻すと、通りを下り、街を出て行く。異形の者たちはその後を追う。

擦り切れた衣服をまとい、穴の開いた靴を鳴らし、列をなし潮騒の如くざわめく、それはまるで黒死病^{ペスト}が流行った時に謳^{うた}われた死の舞踏ではないかと思えた。

街の通りを揺れながら連なる黒い死。

圧倒的な世界の裏側が音を立てて目の前を過ぎてゆく。

「主よ、どうか慈悲をお与えください。主よ、どうか、どうか我らに慈悲を」

神を裏切り神に見捨てられた者達の行進は、しかし聖騎士達がやってくる間もないほど速やかに街を出て行った。

呆然とした沈黙が街を包み、少しの間を置いて本物の純白を盾にした聖騎士が隊を成して通りに現れる。

そして、我に返って彼らを呼ぶ声、大人が悲嘆にくれる声、遅い到着に憤慨する声、子どもの泣き叫ぶ声、犬が無闇に吠える声、様々な音の渦が街に響き渡り始めた。

下女はもう一度寝台を振り返った。

やはりそこには目を開いたままの女主人が無残に転がっている。

「奥様……」

下女は知らず冷たい板張りの床に崩れ落ちた。

主人はこんな風に自分の人生が終わるなどとは思ってもいなかっただろう。しかし彼女が死んだ今、自分は雇い主を失ったことになる。

これからどうしたらいいのか……胸に溢れた不安に嫌悪を感じ彼女には自分の顔を覆った。

自分の先行きを憂うよりも先に主の死を哀しまなければならない、彼女はそう繰り返し繰り返しつぶやき続ける。

ランタンひとつの小さな炎に照らされた部屋の中で。

近隣の町や村が魔物に襲撃されているという噂はあったのだ。

ブランド・ノワールに率いられた吸血鬼の群れに町ごと襲われるのだと。

彼らは静かに街に忍び込み、悟られぬよう住人を次々襲い、誰か一人にでも気付かれた時点で群れごと風のように撤退する。

いつかこの街にもやってくる——言葉にはされなかったが、皆が思っていたことだ。

「私のせいだわ」

暗闇を遠ざけようと赤い火が煌々《こうこう》と灯された街、その中を走りまわる聖騎士や住民を見下ろし、若い娘が涙を浮かべていた。

編んだ褐色の髪はほつれ、握り締めた手にも開きかけの唇にも血の気が無い。

「私が止められなかったから。私たちがあんなことをしたから……」
街の大半を眺望できる城。のどかな山の街にはやや似つかわしくない、見張り塔をいくつも有した堅牢な石積みの城。

その広間には彼女や彼女の母、そしてメイドたちや下男たちが集められており、数人の傭兵が立哨りっしょうしていた。

「これはたくさんの人を殺してしまった報いよ」

彼女の首元で、小さな金の十字架が光る。

「私たちは、死をもって死の償いをしなければならぬのよ……」

「エリン、何を馬鹿なことを言っているんだ」

天井の高い広間に男の大声が響いた。それはいつそ清々しいほど。
「お父様」

きびきびとした動きで広間に入ってきた彼女の父親は、ラングドック王室領であるこの辺り一帯を王に代わりに治めている小領主だった。

痩せてはいるが骨格は良く、眼光鋭い。

「これは我々が正しかったことの証明ではないか」

彼もすでに自室で休んでいただろうに、着込まれた衣服にも灰色の髪にも乱れは無く、自慢のエメラルドのスカーフ留めまでしっかりと付けている。背筋を伸ばし毅然とした様は、彼の性格を如実に表していた。

「神はご存知だったのだ。奴らが異端だと。己を欺く者だと。だから奴らはあんな化け物になったのだろう？ 神の御許へ行くことを許されずに」

すべての燭台のすべての蠟燭で揺らめく火が、神に跪ひざまづく者の朗々たる言葉をより一層赤々と照らす。

「ベズイエの異端狩りで教皇特使はなんと言った？ “——すべて殺せ。主こそが彼らをよく知り給う”。そうだ、神は知っていた。奴らは救うに値しない者たちだと」

襲われた側だということを忘れたかのように、広間に満ちていた緊張と恐怖が高揚へと変わってゆく。敵の喉笛に聖剣を突きつける仄暗い気炎、勝利目前の前線に蔓延する飢えた熱。

エリンの父、グラー卿は誰の方も見ずに高らかに命令した。

「ヴァチカンへ遣いをやれ！ 吸血鬼始末人を寄越せとな。今度こ

そ奴らを根絶やしにしてやる。ブラン・ド・ノワールを——吸血鬼
レオナル・ミュラを滅ぼすのだ！」

時は十五世紀後半、中世暗黒時代。

それは物語の時代から科学の時代へと移り行く狭間の時代だった。
志高き若者が過去と未来を学び道を切り拓き、パトロンたちの財
力で絢爛な芸術が花開く一方で、民は貧困にあえぎ、神の御名を掲
げた魔女狩りの粛清はなお白さを極め、呼応するように夜の闇は深
く、その世界を魔物が闊歩していた時代。

光はまばゆいほどに輝き、それゆえに影も底なしに昏く濃い。

誰かが蹴飛ばした髑髏は、明日は我が身。

差し出される手は神のものが、それとも——。

前編

南フランスの片田舎、パートルという町の背後にその森はある。

通称“黒い森”。

神聖ローマ帝国に広がる黒い森と同じく針葉樹が多勢を占める森ではあるが、その名の由来は黒い見た目ではなく、その森が内包しているものだ。

空は木々の葉に覆われ地上に落ちてくる光はほんのわずか。昼間でも薄暗い森はどちらを見まわしても同じ景色が続き、標はなく、獣道すらなく、棘のある茂みが群生し、下草が絡み合い、堆積した落ち葉の湿った匂いに満ち、彷徨い始めたら最後、方向を失い生きて帰ることは困難。

だからこの地域の民はどれだけ薪に困ろうとこの森にだけは入らない。

そのうえ、この森はある砦を隠しているのだ。

大昔に砦としての役目を終え放棄されたように見えるそれは、半ば土に埋まり表面は苔生し、隙間から芽吹いた若い木々が根を伸ばし破壊を始めている。

だが、この辺りがフランク王国だった時代も、カエサルからガリアと呼ばれた時代も、この砦が今と同じ姿であったことは誰も知らない。

ここに兵が立ったことはなく、ここで将が剣を抜いたこともなく、ここを王が訪れたこともなく、ここが敵に襲われたこともない。

そんな古びた砦の隅に作られた小さな木扉を開けて先に進めば、森の姿は一変する。

林立する木々の間をたゆたう深い霧。世界を覆うのは永遠の夜、赤く燦然と輝く巨大な月。

敷かれた一本の道をただ行けば、やがて霧は晴れ森は終わる。

そして眼前に広がるのは、城と都だ。

星のない夜と赤い満月を従えてそびえたつ黒曜彩の城は、一際高ドンジョンい主塔を中心に、重厚な回廊、天を刺す尖塔をランタン塔を無数に有し、美しく壮麗。

城下に広がる都は、真夜中の宝石屋の如く妖しい煌きに満ちている。

煉瓦色の屋根々々から突き出る時計塔や鐘塔。郊外の方には華美な装飾の宮殿が数々並ぶ。

洒落た照燈フアロに彩られる店々には得体の知れない品々や異国の品々がお高くとまって並び、道行く者は豪華な衣装で着飾った者、黒一色をひきずる者、首のない騎士、骨だけの者、羽飾りと仮面を付けた者、実に様々。

黒鹿毛の天馬が引く馬車が石畳を行き交い、運河の黒々とした漣たぎらみの下を何隻ものキャラック船が走る。

世界各地の名品と珍品と美食と頹廢と背徳と魔物達が集まる都。人間が足を踏み入れてはいけない都。

世界はこれを、暗黒都市、ヴィス・スプランドウールと呼ぶ。

<レオナル・ミュラという吸血鬼を知っておるかえ>

「名前だけは」

“華麗なる悪徳”の名を持つ都市の中心、魔物たちが仰ぎ見る城の一室に、三匹の魔物がいた。

<どんな者かは知らぬと？>

御簾みすの向こうから投げかけられる女の問い。それはあらゆる魔物の頂点に立つ女の声だ。

暗黒都市の女王。

地獄の王も北欧の魔狼も雪の女王も彼女の前では皆膝を付く。

部屋に響く声は老いてもいないし若くもない。穏やかな平坦調だが、感情が排された旋律はゆるやかな圧力と高い浸透力を持っている。麻薬の酩酊に誘う詔。みことのみこと

「それは陛下の方がご存知でしょう」

嫌味も含めた軽口に、

「質問に答えなさい」

御簾の横に立つ優男が目つきを陰しくした。

紅の燕尾に身を包んだその男は物柔らかだが、鉄壁の無表情をのせた顔と切れ長の双眸は、ローヌ氷河もかくやというほどの冷やかさだ。

侍従長官にして女王エクリプス近衛隊副隊長という肩書きだが、つまり女王陛下のお世話係で殺傷能力が高すぎる懐剣。

例えれば白鳥だろうか。

優美で凶暴。

<アルビオ、よい>

「……はい」

御簾の中からの制止に彼が胸に手を当てた。

一拍置いて女王の言葉が続けられる。

<確かに少しは知っておる。派手に人間を狩っていると聞いたえ。

通称、ブラン・ド・ノワール>

「手下の吸血鬼どもを大勢引き連れて、フランスのラングドック周辺を次々襲っていると聞きました。所詮、情報源は人間たちの噂に過ぎませんが」

言外に興味がないと漂わせ、台詞の主は白い手を伸ばしてテーブルに置いてあったティーカップを取った。

一口味見をしてからビロード張りのフレンチソファに深く背を預ける。

「私はそれ以外は何も」

「魔貴族たちが彼を潰そうとしているという話を聞いたことは？」

壁の花と化している長官殿が訊いてくるが、男は首を横に振った。「いいえ、存じません。しかしあり得ないことではないでしょうね。レオナルド・ミユラが自分たちの地位を脅かす前に潰しておこうという心情は非常に分かりやすい。そうやって淘汰されることは良いことです。どちらが潰れるかはともかく」

陶器から離された血色のない薄い唇からは鋭い犬歯がのぞき、艶のあるテノールが漏れる。完全な他人事として。

<ユニヴェール、わらわはのう……>

「はい？」

シャルロ・ド・ユニヴェール。

それがその男の——その傲慢不遜な吸血鬼の正式名称だ。

歴々の教皇が、緋色の枢機卿たちが、瀟洒な令嬢たちが、王冠を戴く領主たちが、聖なる騎士たちが、田畑を耕す民人が、異国を流離う詩人が、そして闇を闊歩する魔物たちが、魔物の王たちが、憎悪を込めて、愛を込めて、恐怖を込めて、畏敬を込めて呼ぶ名。

三百年の昔から世界に刺さった薔薇の棘。

<レオナルド・ミユラに伯爵位を与えたいのじゃ。彼には期待しておる>

「はあ」

地上を刺す月光よりも冴えた銀髪に、鼻梁の通った彫りの深い白皙。しかしそこには払い去ることのできない永遠の死の翳がはりつき、長い睫毛の下の対の目は呪われた血脈を映して深奥まで紅く、しかし温度が無い。

この男の玲瓏な顔貌に酔い、哀れな一生を終えた女は数知れなかった。

優艶なしなやかさと凍れる目、絶望を許容する強靱な精神、薙がれても痛みすら感じない身体に、高飛車な物言い。そして地上の光を飲み込み尽くす空虚な死。

それらすべてが人を狂わせる。

くだがそれでは魔貴族たちの嫉妬も攻撃も激化しようぞ。そこで、

そなたにレオナール・ミュラの保護を命ずる>

「……………」

その優艶が黙ってカップをテーブルに戻した。

「嫌です」

<ミュラはわらわの気に入りのだよ。馬鹿どもが奴を潰さぬよう護つてくりやれ。もちろん、威信にかけて彼を狩ろうとするだろうヴァチカンからも」

「面倒くさい新人のお守りは嫌です」

「ユニヴェール卿、これは陛下直々のご命令です」

再びアルビオが口を挟んでくる。

「貴方のところのメイド、今頃ミュラ卿のところだと思えますよ。今回は貴方の給料を美術品と宝玉で払うことになったと伝えたら、ふたつ返事で一緒に付いてきたそうです」

「……あの守銭奴め！ 先にくすねる気だな」

思わず立ち上がった吸血鬼は、牙の奥で毒づいた。あのメイドが書斎の片付けを放り出しほいほい付いていった絵が鮮明に浮かぶ。というよりも、たぶんその絵は現実だ。

<もうひとつ>

不興を隠しもしない吸血鬼に向かって女王がゆつくりと付け加えてきた。

地上に太陽が昇り、暗黒都市に月が昇るのと同じ、“絶対”の王<レオナールは元々敬虔な騎士でな。吸血鬼に堕ちながら暗黒都市に与くみすることを是としていない。あの男はまだ、神を愛している。いかにわらわが我俣とて、暗黒都市に跪つひまかぬ者に爵位を与えるわけにはゆかぬ>

アルビオが継ぐ。

「彼は神に忠実ですが、ヴァチカン——カトリックから異端の罪に問われて殺されています」

「……本題はそちらですか」

吸血鬼は御簾と長官との間に視線をやった。

< 奴の力が欲しい。そなたの力でこちら側に引きずり込め、
異端の騎士。神にすがり続ける吸血鬼。ゆえにブランド・ノワ
ール。

「……………」

ユニヴェールはわずかの間、浅く目を閉じた。

そして再び開いて、胸に手を当てる。部屋中に飾られた薔薇の強い芳香が彼の動きにあわせて踊った。

「陛下のお望みとあらば」

ユニヴェールが退室すると、侍従長官殿が付いて出て来た。

「まだ何か用が？」

本来侍従は女王の傍に仕えているもので、客人を追うことなど滅多にない。

吸血鬼が肩越しに訝る視線をやれば、太古の化け物がおもむるに口を開いた。

「貴方には、私がミュラを潰したがっているように見えますか？」

侍従長官アルビオ。正式名称はアルビオレックス。“王”という単語を名に持つこの魔物は、千年を優に超える遙かな昔から存在している。人がまだ救世主を知らず、太陽を崇め夜を敬い峻厳な自然に平伏していた時代から、彼はそこにあつた。しかし時が移ろい人々がただひとつの神を讃える頃には、その姿は忌むべき魔物へと変えられたのだ。敬虔な神の使徒たちによって。

「長官殿がミュラを？」

「そういう噂があるそうです。幸い、まだ陛下のお耳には届いていないようですが」

城内にあつては万民の母のように振舞うが、血の流れる戦場であればどれだけの首を狩っても眉ひとつ動かさない死神と化す。

生死の両面を司っていた古代の神はその二面性をまだ——否、さ

らに極端に有している。

「陛下の寵がミュラに移ることを妬んで？ それとも長官殿の謀略を知った陛下が貴方を疎んじるように？」

ユニヴェールは半身引いて彼を斜めに見た。そして、

「くだらない！」

大仰な仕草でまとわりつく空気を振り払う。

「だとしたら、貴方はまず私を潰しているでしょう。ねえ？」

実はこの吸血鬼は女王から求婚されたことがあり、しかも丁重に辞退したという前科がある。

「そうしたいのは山々ですが、できることとできないことの区別くらいつきますから」

冗談の欠片もなく苦虫を噛むでもない淡々とした返答。

「……………」

ユニヴェールは一瞬の笑みを口端に浮かべて消した。

そして彼はアルビオに背を向け、城の廊下を歩き始める。

「吸血鬼なんて脆弱な生き物ですよ。貴方たちのような古い古い伝承の神々に比べたらね」

見上げるヴォールト天井は遥か高く、イーリアスやオデュッセイアの壮美な絵物語が歩む者を圧する。ギリシア軍とイーリオス軍の激突、荷馬車に乗せられ祖国へ帰るヘクトールの遺骸、オデュッセウスの前で妖艶に微笑むアイエイエー島の魔女キルケ、セイレーンの歌声響く海原……。

物語の終焉でもある回廊の終点は遠く、ぼんやりと闇がわだかまって視力は届かない。奢侈な金の装飾が施された付柱は城を護る巨人の如き寡黙さでその闇の奥まで居並び、吊り下げられた火のないクリスタルシャンデリアは、世界を包む赤い月光を冴えざえと乱反射している。

溢れる光でも注ぎ込まれた財でもなく、昏い陰影の倒錯によって創り上げられた城。

志半ばで生を奪われた芸術家たちの怒りが、神の下の方の平穩よりも魔の下の方の美の追求を選んだ狂人たちの執心が、創り上げた城。

「所詮、我々吸血鬼は生きた屍に過ぎません。罪を犯した者、破門された者、神に背いた者……いずれにせよ、神が救うに値しないと見放した者の成れの果てです。神が治める永遠の平穩、その国への扉を閉ざされた者」

深い紅の絨毯の上を吸血鬼の黒衣が翻る。裏地に縫い取られた力ラスアゲハ——ユニヴェール家の紋章——があわせて舞う。

「貴方は見放された者ではない。神を見限った者だ」

「何故人間は吸血鬼を恐れるのでしょうか？」

ユニヴェールはアルビオの言葉には応えず、歩を進め続ける。

「太陽に焼かれれば灰になり、銀の銃弾で消滅し、杭を打たれたただけで復活できなくなる。聖剣で首を薙がれたらお終いだし、新たな血が飲めなければ発狂し、幻の過去に耽溺^{たんでき}したあげく、愛だの恋だの情に吞まれて自滅する」

「貴方にはひとつも当てはまらないように思えますが」

「吸血鬼は鏡なのです。もしかしたら自分もこうなってしまうのではないか、神から見放されてしまうのではないか——。彼らが常に抱えている死の審判への畏れが明々と映る鏡。だから彼らは吸血鬼を恐れ、直視したがない。そこにいる哀れな異形は己の未来かもしれないから」

「吸血鬼を恐れるのと、貴方を畏れるのとは全く意味が違いますよ」
強い調子でアルビオが割って入った。

「彼らが貴方を畏れるのは、貴方が神の意義を無にってしまうからです。貴方は、彼らの精神の最大の拠り所である者の存在意義を真っ向から否定する存在だ。何度殺されても甦る。決して滅びることがない」

「神の支配のなんと愚かなこと！」

ユニヴェールは舞台上のように高く歌い、優男に一瞥をやる。

「死んだ後の安寧と救いを求めて生きるなんてくだらない。世の中が品行方正な神父と修道女ばかりになったら、どれだけつまらないことか！」

シャルロ・ド・ユニヴェール。

名門貴族の若き当主でありながら、その一族を皆殺しにした男。教皇インノケンティウス3世から破門され、フランスで毒殺され、ヴァチカンに埋められ、そして吸血鬼として地上に返ってきた男。

彼の興味は――それは生前から――歴史の奔流にあり、いかに世が乱れ人が足掻き彼を楽しませるかにある。求めるのは流す血よりも流される血よりも、己も混じつての流し合う血。

生と富と美と権力と愛に執着するあらゆる狂気が、彼の杯を満たす葡萄酒となる。しかも注がれる酒が聖者のものだろうと人のものだろうと魔物のものだろうと、それは関係ない。

彼は暗黒都市にさえ雇用契約上の忠誠を誓っているに過ぎないのだ。

「私が愛するのは、血を流しながら剣山の頂を目指す者、仲間の手を放しても激流に棹を立てる者、心奥に獣と裏切りと悔恨と苦悩を飼う者、星の予言に抗う者、賢者を足蹴にする者、誰の救いも求めぬ者、すべてに命を賭ける者」

城の廊下は創造者たちの激情と執念に満ち、息の詰まる濃密な気配に覆われている。

しかし通り過ぎる二匹の魔物の華やかな凄味が、それらを一掃してゆく。

「私が一番楽しみにしているのは、最後の審判によって永遠の命を授かり輝かしい安寧に身を任せている神の国へ乗り込んで、甘ったれた怠惰な輩を一人残らず、もちろん神も天使も含めて滅ぼしてやることです」

存在そのものが反逆であり、罪であり、神への冒瀆。

天に助けと祝福を求める民に高らかな哄笑を浴びせ、だが神も天使もヴァチカンも三百年に渡って彼を滅ぼすことができないでいる。

祈りも信仰も正義もこの優麗な死を滅ぼすことができないのだ。

しかしそんなことがあつてはならない。許されてはならない。その矛盾こそが、シャルロ・ド・ユニヴェール。不滅の吸血鬼。

「その時は我々も共に剣を取るでしょう」

物語は永遠ではない。廊下の終わりに辿り着き、アルビオが立ち止まった。

「しかし貴方が陛下に刃を向けるようなことがあれば、私個人ではなく暗黒都市そのものが貴方の敵に……」

「了解しました」^{ダコール}

侍従長官殿の不穏な口上を遮り、

「ご心配なく、いただいてる金の分くらいは働きますよ」

微笑を含んだ闇は闇に溶け消える。

「陛下からのご下命です」

「俺はあいつの手下になり下がった覚えは無い」

「しかしもうお連れしてしまいました」

「持って帰れ。俺は受け取らない」

「それではユニヴェール卿のご不興もお買いになりますか」

「自分の家のメイドを他人に押し付ける奴があるか」

細い月が見下ろす夜の森。

二匹の魔物が口論をしている。

「少しの間預かっていただいただけです」

「そうやって俺に言うことを聞かせた既成事実を作ろうって魂胆だろっが」

ここがどこなのかは分からないが、パールの黒い森とは違う広葉樹の森は心なしか明るい。木々の間を軟風なよかぜが抜けてゆき、下生えが葉を揺らす。虫の羽音、鼠の駆け足、梟フクロウのつぶやき、小鳥の寝言……、無数の生き物の気配がする。

「陛下ほどの御方が、そんな下劣な真似をする必要がありますでしょうか」

「下劣な輩の首領が公明正大なんて話があるか」

不毛な議論に飽きた青毛の馬が前脚で土を掻き、鼻息を荒げる。

「陛下は誇り高い御方です」

「そんなことはどうでもいい」

「——あの」

彼女は馬車の横に突っ立ったまま、片手を挙げた。

「どうやら私は騙されてここに連れられてきたようですが、」

強情な性格を反映した真っ直ぐな黒髪に、白い縦襟ブラウスと灰色のメイド服。メイドに最も必要な素質である愛想を丸ごと道に落

スタンドカラー

としてきた無表情。足下には連れてきた黒猫がまとわりついている。

「ユニヴェール様が承知のことであるならば、私は暗黒都市に従います」

パルティータ・インフイーネ。職業、ユニヴェール家のメイド。

「……とは？」

彼女を連れてきた張本人、黒いフードマントに身を包んだ暗黒都市の使者は、半分仮面で隠した顔をこちらに向けてきた。とはいえ彼の顔のさらされている方が骸骨なので、あまり仮面の意味は無い。

「そこのお兄さんが——」

「レオナルド・ミユラ」

目つきの悪い金髪が律儀に自己紹介を挟んでくる。

「ミユラ卿が私を受け入れる受け入れではなく、私がここに留まるか帰るかという選択であるということです。そして私は留まる方を選びます」

猫が鳴いて咎めた。

彼女は無視した。

「貴方は女王陛下の言いつけどおりにここに私を置いていける。ミユラ卿は暗黒都市の頼みを聞いたわけではなく、ただの人間である私の頼みを聞いただけです。いかがでしょう」

彼女の棒読みの台詞の後に、誰かが台詞を飛ばしたような間が訪れる。

空駆ける雲が月を過ぎ、森が翳^{かげ}つて再び照らされた。

それからややあつて、

「……いいでしょう」

暗黒都市の使者が高飛車にうなずいた。

併せてレオナル・ミユラも渋々ながら首肯する。

「それではそういうことで」

彼女は誰かの気が変わる前にと、さつさと使者の横を抜け、金髪男の横を抜け、猫を従え、城門をくぐった。

森の中の古城。それはロワールやセーヌ、ローヌの川沿いに点在する美しさや栄華を誇示する城館ではなく、要塞としての機能を最優先にされた灰色の無骨な城だった。初期ロマネスクの色褪せた風貌。山のふもとから攻めてくるのだらう敵を静かに睥睨^{へいげい}している。過去そうしていたように、敵がいなくなった今も。

——それにしても。

石造の門衛室の窓に光る目を視界の端に入れながら、白い軍服のレオナル・ミユラが後ろから付いてきている足音を聞きながら、パルティータは奥歯を噛んだ。

“ユニヴェールの給料を美術品で前払い”が嘘だったとは……あの使者、次に会ったらすり潰して白壁に塗り込んでやる。

「今、部屋を用意させている」

「ありがとうございます」

中庭の見える小広間に通されたパルティータは、ミュラの入室に立ち上がった。

「改めまして、私はパルティータ・インフィーネと申します。主はご存知のとおりシャルロ・ド・ユニヴェールですが、ご安心を。私は至って普通の人間です。魔物をバツサリ斬れる伝説の剣は持つていませんし、偉い人に指名された勇者でもありませんし、突如として湧いて出た吸血鬼を葬る能力もありません」

「だから心配なんだろうが」

明らかに客人を不快にさせようという意図のため息をついて、パルティータの前を横切る男。

白い衣装によく映える綺麗な金髪に、ガラの悪い三白眼。その紅の虹彩は真正銘魔物の証だが、しかし彼は首から小さな金色の十字架を下げていた。魔物ゆえ十字架が当る部分の肌が焼けただれているが、そうまでして付けているからには何か思い入れがあるのだろう。

親だとか、恋人だとか。

そもそも、彼のような戦闘体型の男には華奢すぎて違和感があるのだ。

「ご心配には及びません。自分で留まると判断したのですから、何があっても貴方に賠償請求するつもりはありません」

「賠償を請求できる状態ならいいけどな。死んだら金の請求もできない」

「私は請求するつもりはありませんが、主はどうでしょう」

「……………」

思いつきり睨んできたレオナル・ミュラが帯剣しているバスタードソードの柄頭、鍔、鞘は、驚く程に精緻な意匠だ。それなりの金を積まなければ手に入らないし、世界に溢れる雇われ人が積める金の額とも思えない。

「それで、私が騙されてここに連れて来られた理由は何ですか？」

「俺が知るか。こっちの方が困ってるんだ、突然化け物吸血鬼の手

駒を押し付けられてな。お前が奴のメイドでなかったらとつくに命はないさ」

「ユニヴェール様、ありがとうございます」

とりあえず主の人徳に感謝する。

しかしミュラが嘘を付いていることも明白だ。彼は、決定的な理由が分かっていないにしろ、状況は把握している。何か仮説を持っているのだ。

「レオナルド・ミュラという名は聞いたことがあります」

パルティータは黒一色の双眸をひたとミュラに合わせた。

「……が、内容を忘れました」

基本的に他人の噂話には興味がない。

「さつさと寝てさつさと帰れ」

「この城に住んでいるのは貴方だけではありませんよね？」

さつきの門衛室然り、城には多くの気配がある。人間のそれとは違う、冥暗めいあんの底を這う体温のない気配。

「この城内には多くの住人がいるが、その半分以上が吸血鬼だ」

「では貴方も吸血鬼ですか？」

ミュラは窓際へ寄り外を睨み、返事をしてこない。

当然という意味か、肯定を口に出したくないのか。

「ちなみに、ここはどこですか？」

パルティータは話の矛先を変えた。

「ラングドック、ベズイエやアングスの街の近くだ」

「アングス……」

彼の言葉を信じるならば、ここはパテルからは遠くもないし近くもない。しかし彼女はミュラが例に挙げた街の名に引っかかっていた。

「その街は先日吸血鬼の集団に襲われたと聞きました」

「ああ、俺たちさ。俺が連れて行った。エサを食わせる必要があるからな」

抑揚のない声だったが、わざと感情を欠落させていると言った方

が正しい。

吸血鬼が弱い月光に影を深くしてこちらを振り返ってくる。

「怖いかな？」

「まさか」

その問いで何を確かめたかったのかは知らないが、パルティータは一瞬で叩き落した。

「私が恐れているのは“無報酬労働”、“骨折り損”、“無駄な出費”、そういう類のものです。悪党や魔物や化け物は対象外です」

「……………」

「ミユラ様、お支度が整いました」

部屋の外から姿の見えない声がして、ユニヴェール家のメイドは早々に城の一室へ追いやられた。

「…………… やっぱりね」

黒猫を従えた彼女は、大人しく眠りにつくわけもなく、城の中を徘徊していた。化け物吸血鬼の手下だからといって、行儀の悪い客人でいようと努めているわけではない。

どこかから複数のすすり泣きが聞こえてきてうるさいのだ。

「きつとここが原因よ」

古色蒼然とした城の中、半円アーチ型の窓で彩られただけの回廊を奥に進むと、扉のないぽっかりとした空間があった。斜めに差し込む白い月明によってぼんやり発光しているように見えるのは祭壇だ。

いわゆる、毎日神に祈りと感謝を捧げるための礼拝堂。

「さっきまで誰かいたわ」

中に入っていくと、祭壇には手折ったばかりの野薔薇が捧げられていた。花弁は濃いピンク、花芯が黄色いその花は夜気を含んで半分閉じている。

「——他人の城をうつろつのが趣味か」

「この城に住む半分以上が吸血鬼なら、半分以上は何でしょう」

「……人間だ」

「そうですか」

背後にミユラが現れたのは分かっていた。が、それでも彼女は振り返らなかつた。

「人間が吸血鬼と共同生活。その人間はエサとして飼っているわけではありませんよね？」

零落の城に似合いで、礼拝堂もひどく簡素な造りだ。

左右には尖頭のアーチ窓、正面には聖母子画と主祭壇には火が灯された蠟燭一本、隅が欠けて飾り板が剥がれかけている説法台、行儀よく並べられた木製の長椅子。そして銀盤の水に浮かべられている野薔薇。

毎日のミサを執り行うことだけを目的とした飾り気のない部屋。

規則正しく、厳かな文言が人々口から発せられる部屋。

だが、この礼拝堂の祈りの残響はひどく濃かつた。

「ここは異常です」

パルティータは目を細めた。

この部屋には、頭が痛くなる程に身を切る叫びが残っている。もはやそれは祈りとは言えず、呪詛になりかけているのだ。神を愛すあまり、神に懇願するあまり、その言葉は神と世界を呪う言葉に変わっている。

ようやく彼女は、入り口に背を預けている不機嫌そうな吸血鬼に向き直った。

「貴方たちは何者ですか」

「……………」

「ここでの祈りは、人間が生活を営む一環のものとは思えません」

「……そっちこそ何者だ」

「シャルロ・ド・ユニヴェールのメイドです。それ以上でもそれ以下でもありません」

彼女は魔物の紅の双眸を正視した。吸血鬼の方は逸らしていたが。
「神に祈りを捧げる魔物はいません。一部の、神を愛するあまり墮
天した者たちを除いては」

この城の住人を率いているのがレオナル・ミユラであるとする
ならば。

見た限りこの城のどこにも――調度品や彼がまとっている衣装に
も――紋章らしき印がないこと、そして彼の粗野な物言い。それら
は、生前の彼が貴族出身ではないことを示唆している。そして暗黒
都市の使者がミユラに対し“卿”という敬称を使っていたことから、
誰かから与えられている地位は子爵か男爵か騎士。腰の剣へのこだ
わりを考慮すると、彼の属性として導かれる答えは“傭兵上りの
騎士”だ。

「ここで行われているのは規則正しいミサではないはずです。ここ
はもつと、もつと悲痛な祈りで溢れています。まるで魔物が神にす
がるような」

パルティータはミユラを観察しながら続けた。

彼女の足下には、金色の目の黒猫が常に寄り添っている。

「神の救いの手から落とされたという絶望と、赦しを請う嘆きと、
何故こんな今があるのかという怨嗟と」
えんさ

「……………」

口を引き結んでいるその男の年齢は、おそらく主であるユニヴェ
ールと同じ程度、三十をわずかに越えたあたりだろう。端然とした
顔立ちではあるが、それを褒め称える美麗秀句よりも武人としての
強靱さを表す形容詞の方が相応しい。

あの現れ方からして、パルティータが城内の吸血鬼に襲われない
ようずっと見張っていたのだろう。この男、言葉遣いは荒いが根は
真面目だ。彼女の主とは正反対で。

「貴方たちは化け物になるつもりはなかった。なるとも思っていな
かった。でもなってしまうた」

「……………」

さつき会ったばかりの人間の小娘に洗いざらいしゃべるような奴はいない。

それでも構わなかった。

「貴方たちは神を慕い続けている。でも神は貴方たちの手を放した」
包むことをしないパルティータの断言に、漆喰の床に落とされていた吸血鬼の視線が、窓を透かし遠方へ向けられる。

「私が推測するに、生前の貴方は傭兵騎士だった」

凶星なのか、瞬きがこちらを映し、すぐ月夜へ戻る。

「この城に住んでいるという他の吸血鬼は？ 貴方と同じ騎士ですか？」

「……いや」

「では普通の民」

「ああ」

素直でよろしい。

だがこの返事は、彼自身が行き場を失っているという告白でもある。この女に関わることで新たな道が見えないか、無意識に探そうとしているのだ。

「貴方ひとりならまだしも、たくさんの弱い吸血鬼を匿って、暗黒都市にも下らず、派手に狩りをして、ヴァチカンの標的にならない
思っているのですか？ 下手をしたら、本来味方であるはずの暗黒都市からも敵とみなされかねません」

それは彼が一番よく分かっているだろう。

始終不機嫌そうに見えるのは、この男の眉間に刻まれた皺が消える間がないからだ。始まりは過ぎた時のどこなのか、苦悩の証。

「いつまでも逃げられるとは思わないことです」

パルティータは突き放した。半音さえ上がりも下がりもしない調子で、暗黒都市にもヴァチカンにも染めずに。

「……分かっている」

腕を組み唇を噛みじつと石壁にもたれる吸血鬼に注がれる眼差しはない。

祭壇に祀られている聖母も、彼女を囲む大天使たちも、その誇らしげな微笑は彼女の腕の中の無垢な救世主だけに与えられている。礼拝堂に落ちる重い憂愁と絵の中の暖かな陽射しはあまりも、歪だ。

その歪みこそが、パルティータがこの城に放り込まれた理由なのだろうが。

「帰らないんですか？」

「帰らないわよ」

翌朝、パルティータは中庭を望む列柱回廊に立っていた。

その後ろには、黒尽くめの剣士が従っている。

長い黒髪を背中に流し、顔色が悪く、下まぶたに異様なアイラインを描き、腰にはふた振りの剣を帯びている長身の男。物理的に近付かれると不幸まで寄ってきそうな風貌だ。しかもこんな時期に黒尽くめは見た目が暑い。景観を損ねる。

「ユニヴェール卿に怒られませんかね」

「ルナル」

彼は自称亡国の王子だ。国の滅亡の折に魔女の呪いを受けて重要な記憶をぼろりと失くし、昼間は人間、夜は黒猫という二重生活を余儀なくされている。三百年近くそんなかんじで何かを悟ったのか、元々そういう性格なのか、ユニヴェールやパルティータの下僕扱いにも飄々としている、ユニヴェール家の居候。

「貴方、レオナル・ミユラについて何か知っている？」

正直者のミユラが言ったとおり、この城には普通の人間も住んでいた。

さつきから、下の庭の井戸へ水を汲みに人が何人も通る。皆、どこにでもある村のどこにでもいる人間と変わらない。灰色メイドと真っ黒剣士という奇妙な二人組にも気さくに声をかけていってくれ

るのだ。しかし穏やかな顔から滲む疲弊までは隠せていないが。

「レオナルド・ミユラ……最近ラングドックの村々を集団で襲っている吸血鬼の親玉だとしか。巷ではブラン・ド・ノワールと呼ばれているそうです」

「ブラン・ド・ノワール。黒の白、ねえ……」

それは吸血鬼なのに白い衣装をまとっているからか。それとも誰かだけが知っている暗喩なのか――パルティータは昨夜の礼拝堂を脳裏に浮かべながら、口の中で反芻した。はんすう

「パテルはある意味ユニヴェール卿に護られていますからね。あの化け物の膝元が他の吸血鬼に襲われるなんてことがあるわけがない。だからあまり興味がないように、実のある噂はありません」
「そう」

中庭を囲う壁に沿うように植えられたエニシダは、こぼれるほどに黄色の花をつけていて、人が通り空気が動くたび、強い芳香が体を包む。

強い日差しを浴びて草木や花々が作る影の中を、小さなアブやハチが飛びまわる。

「私がここにいることがユニヴェール様にとって不都合なら、すぐに連れ戻しにくるでしょう」

しかし昼のあけすけな光に晒ひされて、城も神秘をまとい続けることはできないようだった。

所々崩れ落ちている城壁や、ハーブはびこる庭に埋まっている石砲は、かつてこの城が何らかの攻撃を受けた痕跡なのだろう。

護るべき者を護りとおせたのかは不明だが。

「逆にすぐ連れ戻しに来ないのなら、すでに何かが始まっているということよ。無闇に動かないでおきましょう。少なくとも、動かざるをえなくなるまではね」

「了解」

ユニヴェールではなくパルティータに忠誠を誓っている黒猫剣士は、恭しく呟いた。

「何が来ても斬ればいいんですよね、斬れば。大丈夫、パーティタには傷ひとつ付けさせませんから！」

そして、灰色メイドが風と共に去った回廊でひとり拳を右上へ突き上げた。

「まるで帰ってこんな」

パールの屋敷でユニヴェールは独りごちた。

町の中心からは離れた坂の上、黒い森の前にその屋敷はある。森への侵入者を見張るべく、煤けた時代を冠して座しているユニヴェール邸。昼間はメイドが掃き掃除、夜になると火が灯されるのが常だが、現在屋敷の前は森から飛んできた松葉や草きれ、羽虫の死骸などが散乱している。

つまり、お母さんが家出しちゃった状態だ。

「暇だ」

吸血鬼は食堂の椅子にもたれ深くため息をつく。

自分で淹れた紅茶は不味い。彼はティーカップの中の濁った琥珀の液体を見下ろして、

「あいつは自主的には帰ってきそうにもないな」

窓の外へ、半円よりも丸みのある白い月へと流し目を送る。

「ヴァチカンも動いたようだし」

大きなテーブルの上には、すでに花卉が縮れてしまった薔薇の入った花瓶がひとつ、封を破った手紙が一通。

それはローマに置いている彼の部下からの報告だった。

——レオナール・ミュラを討つため、ラングドックのアングスに向かつてヴァチカンの白十字団が出立した。

主要都市を魔物から護るために配置されているのが聖騎士団。

その聖騎士たちの中でも、吸血鬼を狩ることに特化した者たちをクルースニク

“吸血鬼始末人”と呼ぶ。

白十字団はその上位組織にあたり、教皇庁直属の吸血鬼始末人精鋭部隊だ。十三人編成で七団が存在する。

そのうち四団が向かったというのだから、ヴァチカンの本気だ。ミュラだけでなく、その吸血鬼が率いている集団ごと殲滅せんめつさせるつもりだろう。しかしたかだか数ヶ月世を騒がせている新人吸血鬼に大袈裟という感も否めない。

「何かあるな」

ユニヴェールは長い爪で自身の薄い唇をなぞった。

女王がミュラについて語った情報はすべてではないはずだ。あちらは一番に下に置かれた札を裏返したまま、隠している。

アルビオレックス程の魔物が自身の噂を気にかけていたのもおかしい。ああいうナルシストにとっては、他人の評価なんぞあつてないようなものだ。全部都合よく解釈するのだから。

第一、こうして時を置いても魔貴族たちがミュラを攻撃する様子は一片もない。

「……………」

世界を穿うがつような吸血鬼の眼差しは、口元の微笑と共に意地の悪い色を帯びる。

「そう都合よく事を運ばせるものか」

ローマからフランスへ、幾多の街を抜け、寒村を過ぎ、荒野を原野を林を森を、白い聖衣の吸血鬼始末人の集団が葦毛あしげの馬を駆る。彼らにだけ与えられる聖剣を携え、人としての感情を捨てた仮面

を被り、土埃と地鳴りを立てて、人為らざる者の仮初の命を狩りに行く。

神が創りしこの庭を闇の侵食から護るため、神に救いを求める民のため、神の代理人として魔物を薙ぎ払う。その鉄槌は、それが元々人間であろうが斟酌はない。

かつて聖ベルナルは聖地奪回へ向かう十字軍に対し、言った。

——キリストの騎士にとつての闘いは、主のための、そしてキリスト教徒を護るための闘いである。敵を殺すことはすなわち、悪を殺すことである。死を受けようと、死を与えようと、どちらもキリストのための死なのである。死を与えることは、キリストに仕えるためにすることであり、自らが死を受けることで、キリストの許へ赴くことができるのだ。

国境のない白十字を遮るものは何もない。

十字架のために己も家族も愛も捨てた者たちの前には、生と死を隔てる迷いさえない。

地中海を望むジェノヴァの賑わいを眼下に、プロヴァンスの遺跡群を背景に、サハラより来る南風きたシロココを裂き、アルプスより流るるローヌの大河を渡り、なだらかな葡萄畑の続く山間を、狩人はひたすら前へ進む。

後編

「レオ、そろそろ限界だ」

「テオドル」

滞在中に観察した結果、どうやらレオナル・ミュラの右腕であるらしいその男が、挨拶もなく雑な動作で部屋に入ってきた。

緩い波のある長い鳶色の髪を雑に後ろで束ね、草むらの親戚みたいな色の外套を雑に羽織り、その辺で拾ったような雑な剣を腰に帯び、ミュラにも雑な口をきく。

「どいつもこいつも腹をすかせてて、まともな話もできやしねえ」

「もう少し我慢しろ。まだ前回襲ってから日が浅すぎる」

「我慢してるさ。それがもう限界だって言ってるんだ」

互いに大声を出して怒鳴りあう気力すらない二人の男を眺めながら、パルティータは膝上の黒猫を撫でた。

せっかく持参した紅茶で満月を愛でながら上流階級ごっこをしていたというのに、台無しだ。

暑い時に熱い紅茶を飲むのが最高なのに。

「俺だって喉が渴いて気が狂いそうなんだよ」

「——紅茶、お飲みになりますか？」

場を和ませようと言ったのに、視線で刻まれそうなくらい睨まれる。

「このままだと、城にいるまっとうな奴らまで殺^やつちまいそうだがせ」
椅子を引き寄せ身体を放り出したテオドルが、額に手をやり大きなため息をついた。

「アンタや俺は仮にも傭兵だったし騎士だったから多少の忍耐や無理はきくが、あいつらは単なる農民だぜ？　これ以上は酷だし、もう精神力の問題じゃない」

彼はおそらく、この城に住まう吸血鬼たちのことを言っているの

だろう。

吸血鬼は他者の血をその偽りの生の糧とする。

己の死を偽るために他を殺し、命を喰らい己のものとする。その身が滅びるまで生への渴望は果てしなく続き、喰らっても喰らっても満たされることはなく、喰うことを止めれば抗い難い飢えが理性を蝕む。

彼らを襲うのは、口寂しさや空腹ではない。彼らの飢えは、本能の根源からの生命の飢えだ。家族も恋人も“餌”として認識されてしまふ見境のない飢餓。魂を焼く痛み。

凶暴な生への固執は、多く己自身さえも滅びに導く。自分を失い、何をしているかも分からないまま。

「その女は人間か？」

テオドールの紅の目がパルティータに向けられた。

よろしくない。完全に熱に浮かされている。

「そうだが彼女はやめてお——」

「！」

ミュラが制止する前に男は動いていた。

化け物たる所以の脚力ゆえんで椅子と床を蹴り、一瞬でメイドの背後に降り立つ。

果敢に男の顔めがけて飛びかかった猫はあっけなく振り払われ、

鋭い爪が彼女の首を掴もうとした次瞬、

「テオドール！」

「——！」

ミュラの叫び声が、男の喉奥からの絶叫に重なった。

身体を折り曲げ床に転がり悶絶しているのは、襲った方のテオドールだ。

「……………」

パルティータは椅子に座ったまま、メイド服の裾から取り出した

小瓶の中身をトドメと言わんばかりにもう一度テオドルに降りかける。

「降参！ 降参！」

飢餓熱が吹き飛んだのか、うめきながら男が手を振った。

その手に黒猫が噛み付く。

「私を襲おうなんて千年早いのです」

「お前それ一体何だ……」

呆然と立ち尽くすミユラが、警戒心をだだ漏れにして彼女の持つ小瓶を指差した。

「塩水です」

「嘘をつけ！」

「ユニヴェール家のメイドはこれくらいできて当然です」

「できる根拠は何なんだ」

「暗黒都市の使者に付いて来いと言われて丸腰で行くようではダメだということです」

「どんだけ仲悪いんだよ。……テメェ！」

下からテオドルが無駄口を叩いてくるので、パルティータは踏みつけた。

「貴方は黙っててください。仲が悪いのではなく、仲が良いわけではないだけです」

「どう違うんだよ」

ぶつくさ言いながら男が起き上がり、未だ手に食いついている猫を剥がしにかかる。

「私のことはどうでもいいのです」

メイドはミユラに向き直った。吸血鬼の首領はまだ半ば呆れていたが、その顔の蒼白は死と驚きのせいだけではないだろう。

「吸血鬼の飢えは吸血鬼の狂気の源です」

彼女の主ユニヴェールは、彼女の前では吸血鬼らしい食事をほとんどしない。

朝に夕にテーブルに皿を並べ、ワインを注ぎ、焼き菓子をつまみ、どこでも紅茶を飲んでいるほどの紅茶中毒者だが、それらは本来あの化け物にとって何の意味もないことだ。

しかし彼は毎日その単なる娯楽を繰り返し、狩りをする姿は見せない。

食えることとはつまり生き延びること。

おそらくあの男は、皿に盛られた死骸の山を日々平らげていく人間よりも、その意味を痛切に知っている。

己のために他を殺すという究極の利己主義と、死してなお生にしがみつくあさましい欲。

その黒々とうねる、だが存在し続ける限り逃れることができない原初の狂気の形を、理解している。

それを見せたくないのか、それに支配されている姿を見せたくないのかは、定かではないが。

「貴方も必死で抑えているけれど、限界が近い。違いますか？」

ミュラを見据えてパルティータが言うと、

「……………」

ミュラが何か言いかけて空気を吐き出した。

「貴方は自分が何を護るべきか答えを探している。でも、このままではその答えが見つかる前に全滅するでしょう」

満月は非情だ。

太陽よりも公平に光を注ぐと見せかけて、その実夜陰に紛れるはずだった秘密をあぶり出す。

猫を引き剥がしたテオドールの視線、虚空の一点を凝視するミュラの視線。

「ユニヴェールは元々人間です。貴方たちと同じように。しかも、クルースニク吸血鬼始末人でした」

「吸血鬼始末人……………」

「あの人が吸血鬼始末人として仕えていたのは教皇インノケンティ

ウス三世。あの人の家が仕え、あの人に爵位を与えたのはフランスの尊厳王フィリップ二世」
オーギュスト

白の聖衣に身を包み玉座の傍らに傳かすっていた男は、今や神の名すら聞こえ届かぬ死の権化。

「彼は人の精神の揺らぎが分からぬ魔物ではありません」

むしろ、それを利用して歴史の流れを操る術に長けている。弱みも痛みも知り尽くしている。そのうえで、彼は人にさらに強靱たることを要求しているのだ。例えその精神から血を流しても、差し伸べられた神の手を振りほどき、閉ざされた前に進めと。

「頭を押さえつけてまで服従しろとは言わないでしょう」

この吸血鬼たちは、まだ神に赦しを請うている。信じている。だからこそ、暗黒都市に与することを拒んでいる。しかしどれだけ祈っても拒んでも、吸血鬼として生きていくためには人を殺し血を得なければならぬ。そしてそれは、人の世には決して受け入れられない。

おそらく、ミュラが、テオドールが、この城の吸血鬼たちが閉じ込められているのは、こうした摂理の檻だ。

「ところで」

テオドールへの復讐を果たし、テーブルの上に跳び乗ってくる黒猫。

ユニヴェール家のメイドは、猫の背越しに白い吸血鬼へ問う。

「貴方たちは何者ですか？」

もう、彼の退路はない。

「そのブラン・ド・ノワールとやら、この街には現れたのか？」

「ええ……」

女の首筋に舌を這わせながら問うと、熱っぽい返事がある。

「白い吸血鬼」

つぶやけば、

「貴方は、知っているの？」

甘えた声音が女の紅唇から漏れる。

「——名前だけは」

抱き寄せた女の背後から窓の外のアングスの街を見下ろしながら、ユニヴェールは女王に返したのと同じ台詞を口にした。

そして、女の唇を塞ぐ。

始めは表面だけ。

強弱をつけて口付けながら、徐々に唇を開かせる。

同時に長い指で露わになっている鎖骨をなぞってやると、白い肌が蒸気してゆく。

灯のない部屋に濡れた音が響き、性急な息継ぎが交換される。

「レオナルド・ミューラ。あれは元々騎士だったのか？」

「……そうよ。……グラール卿の雇った傭兵騎士」

恐怖は人為らざる冷貌を前にして麻痺する。

この時だけは、例えこの後自分が亡骸になっているとしても、この時だけはこの化け物のすべては彼女のものだ。

しかしできることなら、この化け物の永遠の女になりたい。

怜悯な唇から愛を囁かれ、人間を引き裂いたその手で抱かれ続けたい、化け物の中の化け物が快楽に眉をひそめる様を何度でも見たい。

その願望は容易く欲望となり、女たちは男の望むすべて与えようとする。

「でも、彼の故郷は……すぐ近くなんだけど……異端の村だったのよ。貴方なら分かるでしょう？ カタリ派だったの」

女がこちらを向き、ユニヴェールの首に手を回した。

「少し前、領主のグラール卿と教会は、村ごと焼き討ちにしたわ。大人も子どもも、全員処刑されたの」

「——すべて殺せ。主こそが彼らをよく知り給う」

過去、飽きるほど唱えられたそれを口にして、彼は感謝を込めて

女金の髪を梳き、額に口付ける。

「グラー卿に反旗を翻して、最後まで村を護ったのがレオナル・ミユラよ」

だがいくら強いとはいえ、ひとり+村人では、領主の軍勢や教会の援軍と戦うことはできない。それは戦闘とも呼べぬほど一方的な聖戦だったはずだ。

「吸血鬼になってしまっなんて、やっぱり彼も異端だったのね。…

…神はお分かりだった」

神は知り給う。救済に値する者か否か。

ブランド・ノワール
「異端の騎士か」

「……そうよ」

女が顔を近付け彼の言葉を奪おうとしてくる。

ユニヴェールが応えて深く唇を合わせてやると、女の腰が物欲しそうに揺れ、身体がしなった。耐え切れない吐息が零れる。

濃紺の空に架かる満月が絡むふたつの肢体を無言で照らし、部屋の中に影を伸ばす。

だが――。

「……………」

吸血鬼の紅が女から再び外界へと向けられた。

眼下の通りには、蠢くいくつもの黒とそれを囲む白があった。

「カタリ派、ですか」

「ああ、俺の村にはそう呼ばれる奴も確かにいた」

レオナル・ミユラ、テオドル、そしてこの城内の人々。彼らは皆、アヴァルという鄙びた村の出身だった。特産も何もないその村は、先日彼らが襲ったアングス近郊に存在しており、グラー卿の治める地域の一部だったそうだ。

だが今はもうない。ほんの少し前に消されたのだ。

「カトリ派という人々は、すでにいないものだと思っていました」
「思想はそう簡単に根絶やしにできるものじゃないさ。今この城にいる普通の人間は、他から逃れてきた隠れカトリだ」

——カトリ派。それを語るには五百年ほど遡る必要がある。

同じ神を敬いながら、その思想がカトリックとは異なる派閥。あまりに教義が相容れないため、カトリック批判を含んでいたため、カトリック教会から“異端”の烙印を押された集団。それがカトリ派だ。

一神教のカトリックに対し、カトリ派は善神・悪神の二神論を説く。

霊的存在は善神が統べるもの、物質的存在は悪神が統べるもの。よってこの世は悪神が創造した汚れた地であり、本来純粋な存在だったはずの我々は、悪神によって低劣な肉体という箱に閉じ込められ、この俗世に繋がれてしまった。

だからこそ、聖なるキリストは肉体を持った人間であるはずがなく、彼は我々を導くために現れた霊的な神の御使いであり、彼の教えに従い厳粛な禁欲生活と清貧で魂を浄化すれば、我々の魂は死によって肉体を離れられた時、天への救済を受けることができる。

墮落と腐敗の代名詞でもあったカトリック教会の聖職者とは全く反対の高潔な禁欲を貫くカトリ派の宗徳者（せいしやくとく聖職者）たちは、人々に衝撃を与え、賛美を受けた。

それらの教義はカトリックにとって許されざるものであり、聖職者の在り方を真っ向から批判するものであり、しかも南フランスで拡大したこの一派はやがて教皇の権威、王の権威に従わなくなっていく。

カトリックはカトリ派を禁止し、1209年、カトリ派とカトリ派を保護する領主を打ち倒すための十字軍が編成され、幾度の物理

的な破壊——異端の皆殺し——によって、カタリ派は歴史から姿を消すこととなる。

「アヴァルの村人全員がカタリ派だったわけではないが……皆殺しだった」

ミュラの声は低く、込み上げてくる吐き気を抑えているようでもある。

「けれど貴方たちは、カタリ派の住民を突き出すことも、彼らを残して村を脱出することもしなかった」

「できるか？」

反駁してきたのはテオドルだ。

「ただ少し信じ方が違うただけ。それだけで隣の婆さんを処刑人に渡せるか？ 妊婦を火刑台に括れるか？ いつも薪を分けてくれるおっさんを見殺しにできるか？」

ミュラよりも直情的な男が声を荒げる。自分の身体を支えるのも億劫なようで、両手をテーブルに叩きつけて体重移動を誤魔化しながら。

「いいえ」

蠟燭の芯が燃える音が聞こえるくらいの沈黙が訪れる。

異端討伐という言葉は、魔物討伐と同じ意味を持つ。悪の打倒。正義の殲滅。そこに人の姿はない。

十字軍が火をかける者は、聖騎士や白十字団が薙ぎ払う者は、悪であって人ではない。

愛すべき隣人は正しき者のみであり、その正しさは神とヴァチカンによって測られる。

「例え反逆の徒として皆殺しに遭おうとも、誰も、こうなるとは思っていないかった」

金属の金より冷たい色の髪の下で、ミュラの相貌が歪む。

「まさか吸血鬼に堕ちるとは」

カトリックもカタリも己の正義を信じている。

いかに反逆されようと、いかに迫害されようと、神への理解と崇敬は自分たちの方が大きく正しいと。

しかし処刑されたカタリ派がそろいもそろって吸血鬼になったということは、カタリ派は神から認められていない、神はカタリ派を救わない、そう証明されたも同然だ。

「それで……」

あの礼拝堂。

神を信じながら救われなかった者たち。神の意に反した者たち。

——裏切ったのはどちらなのか。

混乱が渦を巻いて悲鳴を上げている。

……しかし。

パルティータは一点思いあたり、暗く沈んでいるふたりの男へ口を開いた。

人間を吸血鬼にすることができないのは何も神の意思だけではない。

「もしかして貴方たちがこうなったのは……」

「大変です！」

「……………」

まあ、こういう妨害があるのは珍しいことではない。

村人の——吸血鬼のひとりだ——男が分かりやすく慌てふためいて部屋の入り口に手を掛けていた。

「我慢できなくなった奴らが勝手に出て行ってしまいました！　おそらくアングスへ！」

谷間の拓けた場所にあるアングスの街は、夜半もとうに過ぎているというのに眠りの精を追い出し騒然としていた。

街の中心の円形広場には、一網打尽に捕えられた吸血鬼たちが縄で縛られ集められている。その周りを囲むのはヴァチカンからやってきた白十字とこの街の聖騎士たち。

街の住人たちは家々から顔を出し、固唾を吞んで成り行きを見守っている。

火はないが、明るすぎる満ちた月がすべてを暴く。

「ブラン・ド・ノワールはどうした。お前たちを置いて逃げたか？」
どうやら、首領はまだ手にかかつていないらしい。

鐘塔の天辺で足を組むユニヴェールは、やる気のない嘆息を漏らす。

「……うちのメイドは一体どこで何をしているんだ？」

腐っても騎士。

最近では騎士なんて称号倒れで騎士道精神の欠片もない輩も多いが、レオナルド・ミュラは死んでも、魔物となっても、精神は騎士であるらなかった。

心配だからアングスへ向かうという彼を、テオドールも止めず、同行した。

パーティータもボロ布を被り吸血鬼の仲間のフリをして、付いていくことにした。

黒猫は残してきた。

そうして、案の定こういう状況にある。

だいたい、考えなが上の言うことをきかずに暴走したツケは、上司が払うことになるのだ。

「お前たちが神の怒りに触れたことは明白だったようだな」

抜き身の聖剣を手にした白十字が言う。

ぐるぐる巻きの吸血鬼たちを背に。

捕えられている吸血鬼たちは空腹のためか目は虚ろ、口は開きっぱなしで、意味のないうなり声を垂れ流しながらがりがりとし畳を

引つ掻いている。農民そのものの継ぎだらけの服がまた、不憫の涙を誘う。なんだかどちらが悪者か分からない。

白十字に対峙しているミュラが白い外套であるのも一因か。

「生きていれば神に背き、死んでも人間の敵になるとは、どこまでも救い難い」

「……………」

ミュラとテオドールが無言で剣を抜いた。

まだ血は流れていないのに、血の匂いが辺りに漂う。

吸血鬼始末人の聖剣が今まで斬り捨てた分、ミュラやテオドールの剣が今まで濡れた分、その怨みや憎しみが刃に染み付く。

研いでも研いでも落ちることのない曇り。

山際の紺が若干の白味を帯び始めた中、未だ残る月光が命を断つ光を反射する。

「そう早まるな」

白十字が仮面の奥で言った。

「もうひとつ見せたいものがある」

そう言われた時は見ないに限る。どうせこちらに不利なものしか出てこないのだ。

「……エリン」

ほら。ミュラがよろしくない反応をした。

白十字の合図で連れてこられたのは、ひとりの娘だった。

褐色の髪を綺麗に編み込み、ひと目で上流階級と分かる若草のドレスをまとっている。目を見張る美しさというわけではないけれど、線の細さから繊細な慈愛が滲んでいる。己が傷つくことも怖い、他人が傷つくことも怖い。あまりにも、壊れ物取り扱い注意。

しかしそんな彼女に不釣り合いなのは、手にはめられた手枷^{てかせ}だった。「お前が吸血鬼になったのは自分のせいだと罪を告白した。お前の罪を己の命を持って償うそうだ。一介の騎士のくせに、良くできた恋人を得たものだな」

「領主の娘を処刑するというのか？」

「神の前ではすべてが平等だ」

「……何が要求だ」

物分りのいいミュラが、剣を構えたまま問う。

「お前が大人しく滅ぼされれば、エリン・グラアの罪はなくなるだろう」

素晴らしい交換条件だ。

正式な罪状がある以上、エリン・グラアが処刑されたところで教会は痛くもかゆくもない。

エリンの命を想ってミュラが降伏してくれば、白十字も聖騎士も血を流さずに問題の吸血鬼を始末できる。残された農民だらけの吸血鬼を滅ぼすなんて、鼠退治よりも容易い。

「レオ、ごめんなさい。私はあの時、貴方の村が焼かれてしまった時、お父様を止められなかった」

エリンが声を震わせる。

「だから、貴方は止めなきゃいけないのよ」

彼女はきつと、事を咀嚼そしゃくしきれていないのだろう。

父が恋人の故郷を潰したと、恋人が吸血鬼として——神から見放されて——甦よみがえったこと、その恋人が人間を襲っていること。

彼女の中ではそれらはまだ現実ではない。

彼女の茶色い瞳の中には悲哀と愛憐の色しかないのだ。情しかない。理性はない。

己のためにミュラが舞台から降りてくれることを信じている目。

自ら、滅びの道を選んでくれると確信している目。

「……レオナール」

テオドルが脅えの混じる視線をミュラに向けた。

何を選んでも、ミュラは何かを失う。

エリンの命を選べば、自らと村人を。自らと村人を選べば、エリンを。しかも、エリンが処刑されたところで、村人が人質になっている状況も、白十字との圧倒的な数の差も変わらない。

白十字の純白が輝きを増すのに対し、吸血鬼の白は褪あせてゆく。

「……………」

口を引き結び、白十字を睨みつけるレオナル・ミュラに退路はない。

——いや、始めから彼に退路はない。……始め？ 果たしていつから、彼はこの袋小路に追い込まれていたのだろうか？ 始めとは、いつのことだ？

「あ」

くだらない自問自答を繰り返していたパルティータは、視界の奥に見覚えのある影を捉えて思わず声を発した。

「……………」

一回呼吸をする間に考え、

「あら！ 私、見物をしていたら人質になってしまったわ！」

声高に棒読みをしてボロ布を取り去り、テオドルの腕の中に入って喉に刃を当てさせる。

「おい！」

テオドルが驚いて身を引こうとするが、許さない。

「ああ、困ったわ！ このままでは殺されてしまう！」

「何故ここに……」

吸血鬼が人質に取った（取らされた）小娘を見て動揺を露わにしたのは白十字だ。

「パルティータ！」

無意識に叫ばれた名前には、亡霊を目の当たりにした人間の驚愕が凝縮されている。

聖騎士たちはそんなヴァチカンの使徒を前に、緊張を全身に走らせる。

身体の硬直は精神の硬直。

突然の事態が不可思議な鋼の系の均衡へと変わり——。

「レオナル・ミュラ。お前が護りたいものは何だ。信仰か、女か、村人か、お前自身か！？」

夜の鋭いテノールが、アングスの物情騒然を跡形も無く一掃

した。

台詞の後に残る凍った静寂。

皆が声の主を探し、村人や白十字を隔ててミュラとは反対側にその化け物は現れた。

闇をも引きずり込む黒衣、傲慢な嘲笑の浮かんだ白皙、底の抜けた紅の双眸。

さあ、王のお出ました。

「私は神のように心狭くはない。どれかひとつを選べとは言わんがね」

あまりにも悠然と歩いてくるので、思わず聖騎士が道を開ける。

「シャルロ・ド・ユニヴェール……」

白十字が声を絞り出す。

「何故ここにいるか、か？ 私のメイドが待てど暮らせど戻ってこなくて不味い紅茶しか飲めないし、暗黒都市の女王からブラン・ド・ノワールを保護するように求められたからだよ。でなきゃこんな取り得のない田舎に来るか」

靴音を響かせ舞台の中心に進んできた吸血鬼は、白十字とミュラとの中間地点に立つ。

「暗黒都市に与するつもりはない」

ミュラは不滅の吸血鬼を前に、反抗的な目の色を変えなかった。

「構わんよ」

ユニヴェールが肩をすくめる。なんとも軽薄な動作で。

「私にとって誰が何を信じようとそれは何の意味も無いことだ。お前が神を信じようと、地獄の王を信じようと、好きにすればいい。だが、私に従え。そうすればお前の望むものすべてを与えてやろう。信仰も、女も、村人も」

「そんなことが」

「できるさ」

ミュラから台詞を奪った吸血鬼の口調は、やはり軽かった。

しかし次にミュラに向けられた視線は刺すように、声は重く地表を舐める。

「退路がなければ崖から飛び降りろ。それができないのなら、騎士を名乗りながらこの世にしがみつ়資格は無い」

言い置いて、

「三百年程前、このラングドックの地で何があつたか、知らぬ者はいないだろうな？」

彼は明けてきた夜を見上げ問うた。息を潜めているアングスの住人にも聞かせようとするように。

「ベズイエの大虐殺、カルカッソンヌの落城、モンセギユールの陥落」

パルティータは人質に取られた格好のまま、応えた。

吸血鬼の一瞥がメイドを過ぎ、昔話が始められる。

吟遊詩人も語らない、土をかけられ埋められた物語。

「インノケンティウス三世は、異端を徹底的に排除しようとした。

カタリ派討伐の十字軍は、ベズイエの街でカタリ派否かを問わず住民二万人を虐殺した。女も子どもも、老人も神父も、全員。神に祈りを捧げるはずの聖マドレーヌ教会に逃げ込んだ者も、皆殺した。

教会には街人の骸が重なり、喉を裂かれた鮮血に染まり、街は火の池^ナとなった」

ユニヴェールの紅が白十字へと滑る。

「——すべて殺せ。主こそが彼らをよく知り給う」。神父アルノ・アモーリの言葉が忠実に実行されたわけだ」

「……………」

「カルカッソンヌの街では、十字軍に包囲され水が尽き、決死の思いで川に降りた民が捕えられた。領民と共に十字軍と戦うことを決していたカルカッソンヌ子爵トランカヴェルは、民の解放と引き換

えに自ら捕えられ獄死した」

まるでお前のようなとユニヴェールがミュラに向けると、白い吸血鬼が目を伏せる。

テオドールも構えを崩さないまま、目を逸らす。

「モンセギュールはカタリ派最後の砦だった。ただでさえピレネーの冬は厳しい。兵糧攻めにされたカタリ派は、それでも二ヶ月耐えた。しかしそれ以上は無理だった。降伏を宣言した彼らは、自ら薪を組み、炎の中へ身を投げた」

ベズイエの大虐殺が行われた時代には人間だったこの男も、十三世紀も半ばを過ぎたこの頃にはすでに化け物になっていたはずだ。時が歩を進めるたび、無数の死がこの男を過ぎてゆく。戦禍、飢餓、疾病、老衰、強盗、処刑……それらを冷然と見送る眼差しに温度はない。

「三百年経っても同じ事を繰り返しているのか、お前らは。能なしめ」

突き放した響きに、白十字のひとりが反応する。

「我々は人を殺すのではない」

「悪を殺すのだ！」

ユニヴェールがまたも途中で揚々と台詞を奪う。

しかしすぐに音調は沈んだ。

「好きにしろ。互いに勝手に正義を叫んでいればいいさ。それを心底信じているのなら、安易に引くべきではないし、妥協すべきではない。徹底的に潰しあえばいい。最後に残った方が絶対的な正義だ。相手が死に絶えれば、文句も出るまい？」

一拍。

吸血鬼が吸血鬼を横目に見る。

「だが、私はレオナル・ミュラを保護するように命ぜられた」

「……だったら」

ミュラはつべこべ言わずに助けるよ、とでも続けたかったのだろ
うが、

「お前を助けるのは簡単だが、お前にはたくさんのおまけがついている。私はオマケまで助けるとは命令されていない」

ふいつとユニヴェールは明後日の方を向く。

「……なっ」

「つまりはお前の決断次第だよ」

ポーズを解いたユニヴェールが、今度は大仰に両手を広げた。

白い手袋が宙に滑らかな軌跡を描く。

「神と女の愛を追って村人もろとも愛に殉じるか、愛に先んじて騎士の矜持きやうじを捨てるか！」

高らかな演説がアングスに響き渡る。

「世界の奴隷になるか、世界を足蹴にするか！ 死に甘んじ受け入れるか、死の首を絞めてやるか！ 愛に翻弄ひんろうされるか、愛を従えるか！ 打ちひしがれるか、立ち上がるか！」

馬上から楽の音と共に大声を張り上げる国王公示人よりも、華やかな、艶あでやかな声音。

「誰でも選ぶ時は来る。お前のそれは今だ、レオナル・ミュラ。

お前に猶予はない。清廉な信徒としての一時いっときを、良き伴侶としての一時を、誇り高き騎士としての一時を護りたいならば、私は黙ってお前たちが滅びるのを見届けてやる。だが、お前が本当に護るべきはそれか？」

「……………」

噛み付く目をユニヴェールに向け続けるミュラ。

「身をもって知ったろうに。神はお前が思うほど公正ではない。世界はお前が願うひと欠片ほども平等ではない」

口を挟む者はおらず、沈黙に死の鍵がかけられていた。

「そんなものに屈する潔さで何が護れるというのだ？ そんなものに膝を付いて、悔しくはないのか？」

「……俺が俺自身を捨ててお前に忠誠を誓えば、お前は村の奴らもエリンも俺たちの信仰も俺自身も護るといつのか？」

ミュラが剣を下ろし、胸元の十字を握り締める。

カタリ派は炎に身を投じてでもカトリックに折れなかったのだ。
誇りある騎士が魔物に折れることは、生きながら焼かれる以上の苦
しみを負うことになるだろう。

人間の精神のなんと純粹で頑ななことか！

「さつきからそう言っている」

「吸血鬼の言うことなんか信用できるか。先に、可能だということ
を証明してみせろ」

「！」

ミウラのあまりに正当な要求に、ユニヴェールが仰々しく柳眉を
上げた。

流れの岐路を読み取り、

「ユニヴェール。ひとつ情報を教えてやろう」

白十字が割り込む。

「こいつらの城にはすでに、白十字と聖騎士が向かっている。残り
の吸血鬼や異端を捕えるために」

「それは準備のよろしいことで。……ところでパルティータ」

衝撃から立ち直ったらしい吸血鬼が自分のあごをつまんだ。

「はい」

「ルナールはどうした？」

「城に置いてきました」

ユニヴェールがうなずきもせず東の空を見やる。

夜の藍色を押しやりながら、刻々と橙黄^{とうわう}の輝きが稜線に広がって
ゆく。山と森の黒い影が輪郭濃く光を際立たせ、水紋の如く澄んだ
階調が神々しく世界を目覚めさせてゆく。

「ではそちらは特に問題ないな」

南風が色を帯び出し、生命が息を吹き返し始める。

遠くで雄鶏が時を告げた。

と、

「——！」

いきなり村人たちが身をよじって奇声を上げ始めた。

縛られたまま、互いを引きずりあつて四方八方へ逃げようとする。だが、怪力同士なので結局少しも逃げられていない。

猛獣危険。

さすがに白十字は動じていないが、アングスの聖騎士隊は魔物たちの咆哮に一步退く。

「ああそうか」

ユニヴェールがぼんと手を打って、頭をかく。

「お前たちは太陽がダメなのか」

吸血鬼は太陽に焼かれると灰になり滅びる。お子様でも知っている。お約束だが、約束を守ったことのない化け物は失念していたらしい。

「では」

男がニヤリと笑い片手を挙げ、小気味よく指を鳴らした。

そして次の瞬間、視界が蠢く黒で埋め尽くされる。

『げ』

そのお上品でない音は、白十字、聖騎士、パルティータ、アングスの夜に息を潜める住民たち、どれだけの人間の唱和だったのか。それらの人間の網膜にばさばさと映っているのは、黒い蝶だった。古の呪われた名門ユニヴェール家の紋章、カラスアゲハ。死者の魂を運んでいるとも伝承される黒艶の蝶が、百頭を超えて空に舞い上がる。

そして広場の村人は誰もいなくなった。

輪が連なつた縄が、ぼつねんと舗石の上に置き去りにされている。皆が呆然を体現している間にも、頭上に舞う蝶の数は増えてゆく。森の奥、ミユラの城があつた方からも黒い一団が集まってきたのだ。ひらひらと舞う蝶は美しいが、これだけたくさんだと気味が悪い。

人は、花々が咲き乱れる百花繚乱は愛でるくせに、生き物の大群には恐怖を抱く。

到底立ち向かえない圧倒的な生命のうねりを前に、本能が脅える

のだろう。

個々では人には遙か及ばぬ儚い生命が、群れることによって別のひとつの意思を持ち、人をはるかに凌ぐ生への執着を剥き出しにする。

弱いと思っていた者が、反逆の烽火^{ほづか}を上げる。

そして強いと思い込んでいた己の無力を知る。

それこそが根源的な恐怖だ。その恐怖は太古から現在まで地上に立つ人々の間を黒々と流れ、歴史を作ってきた。

恐怖を払拭するために勇気を唱え、剣を取る。

それは新たな恐怖と抵抗を生む。

散った命を踏み台にして、飲み込んで、濁った大河は無言で流れ続ける。

「全部集まったか？」

吸血鬼がもう一度指を鳴らすと、黒蝶の大群は石畳に薄く伸びるユニヴェールの影の中へと吸い込まれていった。

「残るはお前たちだ」

とばつちりを受けて残されたテオドルと共に、ミュラが地に膝を付いていた。

彼らもやはり規格内の吸血鬼らしく、陽光に当れば滅びるようだ。滅びは死とは違う。滅びは無への一方通行だ。天国も地獄もなく、ただ無に帰る。

「証拠を見せるとかごねていると灰になるぞ。お前が灰になったら、お前の大事な村人を生かしておく義理もない」

大雑把な脅迫もあったもんだ。

「……信じていいんだな？」

歯を食い縛り、肩で息をするミュラ。それを平坦に見下ろすユニヴェールの背後で、白十字がエリンに剣を突きつけている。

「お前が信じるか否かは問題ではない。私に忠誠を誓うか否か。だが、」

太陽の端が一条の強い光を世界に放射した。
ゆつくりと色を取り戻す街、濃さを増す影、朝焼けに底辺を染める雲。

「私は私に膝を折る者を決して裏切らない。神を殺してでも、世界すべてを焦土に変えてでも、例えば私が滅んでも」

「……………」

すべての魔物が帰る場所。

神の制裁からも、大天使の剣からも、闇を庇護する大樹。

愚かな大言壮語と晒^{わら}われそうな口上も、白十字の険しい顔が虚言ではないことを裏付けている。

「エリン、すまない」

彼女の方は見ずに、硬い動作でミュラが胸に手を当てる。垂れた前髪で表情は見えない。声は掠^{かす}れてざらついていた。

苦い、そして痛い。

「シャルロ・ド・ユニヴェール」

その間は、橋を渡るために与えられた時間。

一步は小さく、しかし大きい。

「………… お前に忠誠を誓う」

最後、レオナル・ミュラは顔を上げた。

誰にも駆逐することのできない騎士の眼光。

「よろしい」

魔物を貫く光の本線が届く直前、ユニヴェールが再度指を鳴らした。

するとふたりの姿が消え、ふらつきながら羽ばたいた二頭のカラスアゲハが、吸血鬼が差し伸べた手の中へと消える。

「……………」

ユニヴェールが小指から親指へと流して手を閉じ、動きを止めた。
そしてこちらを見ないまま言う。

「パルティータ、お前、得物は持っているか？」

「すりこぎがひとつ」

彼女はすでにそれを手にしていた。

「それでは心もとない。あれを使え」

ユニヴェールがあごで指し示した街の入り口の方から、黒い剣士が青毛の馬に乗って駆けて来た。

朝になり呪いが去ったのだ。

「ルナール！」

「びっくりですよ！ お城から誰もいなくなっちゃうんですもん！」

「途中にヴァチカンの人たちがいなかった？」

「とりあえず全部片してきました」

ルナールがかいてもいない額の汗を拭う。

「あ、そう」

——と、

「下手な芝居はもう止めにしたらどうだ」

こちらの心温まるやり取りを無視して、ユニヴェールが聖なる一団に声をかけた。

「なあ、エリン・グラー」

名指しされて、悲劇の乙女が吸血鬼にキツと敵意を向ける。

「娘が処刑されるというのに泣きもしない親がいるものか」

言葉に誘導されて、エリンの視線が広場を囲むひとつの建物へちらりと動いた。

それを追った先では、灰色の髪の厳しい顔をした男が窓からこちらを見下ろしている。あれは親の顔ではない。指揮官の顔だ。

「私を一番に愛しているなら、道を正してくれると思ったのに」

娘が少し力を入れただけで枷は外れ、からんと滑稽な音を立てて転がった。

ルナールに馬上に引き上げられたパルティータは、抑揚のない目で広場を見渡した。

「ミユラ卿がまだエリン嬢を愛しているのなら。エリン嬢が処刑されると知れば、助ける道は己の滅びしかないのなら、騎士は自ら滅

びを選ぶだろう？　ですか」

白十字が動こうとするのを吸血鬼が目で威嚇する。

「みなさんで口裏をあわせて、それが筋書きでしたか？　すぐに殲滅させられてしまうだろう村の人たちを残すことを是とする騎士にも見えませんでしたか？」

愛をためす。

神が人をためすが如く。

「分かる必要はないがね」

ユニヴェールが白十字に向き直り、背後のルナールに手を出した。察した剣士が腰の得物をひと振り、吸血鬼に投げる。

「敬虔な騎士が吸血鬼に忠誠を誓うなど、滅びる以上の屈辱だ。半永久的に奴が背負う十字架となるだろう。それでも奴は私に屈した。何故か分かるか？」

鞘から抜かれた鈍色の刃が、ユニヴェールを主と了承する。

「お前も護りたかったからだ。エリン・グラ―。私は彼と彼の護りたいものをすべて護ると約束したからね」

金色の黎明が今日を起こす。やがて大河の一滴として去り行く今日を。

「奴は、君の処刑が狂言である可能性も考えていただろう。だが教えてそれを質ただそうとはしなかった。どれもこれも護りたくて己の首を締め上げる、呆れた優しさだな」

風が緑の匂いを帯びる。一匹の蝉が朝靄あやもやを震わせ始める。

忘れられていた豊かな熱気が、大地から立ち昇りくる。

「ルナール、パーティタを連れて屋敷に帰っている」

「卿はどうします？」

「どうする？」

吸血鬼の問いは白十字へ。

「貴様らの目当ての吸血鬼はもういない。手ぶらでは帰れないというのなら、お相手するが」

「パーティタをお前に渡したままにしてはおけない」

「……おい」

ユニヴェールが半眼で振り返ってきた。

「……お前ヴァチカンと知り合いか？」

「少しだけ」

メイドは指と指で少しの量を作って見せた。

「なんて面倒臭い！」

言いながら、吸血鬼の口角が上がり牙が露わになる。

「特務課デュランダルの隊長殿でもなければ私の相手にはならんだろうが……」

聖騎士がエリンの腕を引っ張り、白十字が二匹とひとりを囲むように展開した。

「殺やり合いたいのなら仕方ない」

微笑み、黒の麗人が軽く地を蹴る。

次瞬、光が閃き銀色の剣響が街を貫いた。

吸血鬼の剣と聖剣とが交わったのは一瞬、ユニヴェールがすぐさま切っ先を翻し、横から飛び込んできた白十字を下から上へ斬り上げる。

鮮血が黒衣に飛沫しぶく前にその姿は中空を跳び、間合いを計っていた聖騎士に一撃が振り下ろされる。

背後からの一閃を振り向き様にかわし、左右からの追撃を右は剣で受け、左を手で握る。滑らせ払いのけた刃はそのまま左に突き刺し、抜いた刹那、まとめてやってきた一団を撫なで斬る。

人間を超越した吸血鬼の力に、一切の無駄がない剣跡。

例え身が分かれたるほど刻まれなくとも、激甚な衝撃の数々は骨と臓腑ぞうぶに叩き込まれる。

そしてたたらを踏み、血を吐いた瞬間に首が落とされる。

仮面が落ち、割れ、踏まれる。

厳粛な朝が薙はがれ、血塗られる。

いつしか、メイドと黒猫剣士を乗せた青毛馬は見えなくなってい

た。

街の外へ向かってぼろぼろと聖騎士やら白十字やらが転がっているが、無事であることに疑いはない。

あの黒猫、剣の腕だけはユニヴェールに匹敵することをユニヴェール本人も認めている。

まだ無傷の白、赤に染まった白、入り乱れる中を黒衣が踊る。

彼にとってはこの程度、殺し合いではなく剣劇でしかないのだ。

人を制するために洗練されたはずの剣技、それが有無を言わず聖なる狩人を屠^{ほぐ}ってゆく。

白い石畳には赤い花が咲き、絶命した吸血鬼始末人が空虚な眼窩を空に向けている。

濃い血臭が街に広がり始め、凄惨な絵は人々の内腑をえぐる。

鳥も鳴かない朝が、山の奥で蝉の鳴く朝が、アングスの今日だ。そしてそれもすぐに過去となる。

終

「ユニヴェール様、アルビオレックス長官からお手紙です」

吸血鬼が食堂で紅茶を飲みながら黒猫をからかっていると、パルティータが入ってきた。

「レオナルド・ミューラ一派が暗黒都市に引っ越したお祝いのお誘いでしょうか」

ユニヴェールは銀盆にのせられたそれを取り上げ、斜めに目を通して、

「——いや」

含んだ目をメイドにやる。

「早く報告に来いとお怒りだな」

「まだ行っていないかったですか？」

驚きも非難もない乾燥した疑問符。

「当たり前だろう。暗黒都市の私の領地に奴らの村と礼拝堂を造って既成事実にしてから報告に行かねば、ねちねち文句を言われるではないか」

「既成事実にしたところで言われるとは思いますが……」

「だが造ってしまえば、それを覆くつがえすことはできん」

「ああ、悪徳政治屋のやりくちですね」

遠くを見るメイドの目に、月のないパールの夜が映った。夏の夜の静寂は、生命の蠢蠢きに満ちている。暗がりに潜む小さな点は同時に過去から未来への線であり、そして世界を流れる奔流でもある。「軽口を叩いていられるのも今のうちだぞ。手紙の続きには、お前を引き渡せとあるからな。陛下のものは陛下のもの。私のものも陛下のもの。何て横暴な思想だ」

「まあ」

驚きも困惑もない乾燥した感嘆符。

「ヴァチカンとの関係がどうたらというのが耳に入ったらしいな。

地獄耳め。あの狐目白鳥男にこっそり監視されていたとしか思えん」

「向こうの方が給料いいんでしょうか」

「引き抜きの話ではない」

「冗談です」

メイドとして採用する時にローマの貴族出身だと言った口が、あの時のように短く笑う。

「貴方が私を引き渡すわけがありません」

灰色の小娘が、予言のような口調でこちらを見下ろしてきた。

吸血鬼は横目でその視線を捕える。

「人間風情が魔物と契約をして、逃げられると思うなよ」

押しやられた紅茶のカップに、花瓶の薔薇の紅い花弁が落ちた。

冷たくなった液体からはもう、芳香は広がらない。

そして――

「分かっています」

「――ルナール！」

パルティータのからんとした返事と、化け物吸血鬼の罵声が重なった。

飼い主への無礼に怒った忠臣猫が、全身全霊の力でユニヴェールの手には噛み付き報復を果たしたのだ。

黒猫を手にくつつけたまま立ち上がり、ぶんぶん振り回す吸血鬼。

「ユニヴェール様」

「何だ！」

「死人は痛みを感じないのでは？」

しばし天井を仰ぐ貴人。

まだ猫をくつつけたまま手を打つ。

「……ああそうだった」

それから数日後、暗黒都市へ報告に行った帰り、あの回廊の終点で、ユニヴェールは再び侍従長官に呼び止められた。

「ユニヴェール卿、貴方のところのメイドの件ですが、」

「パルティータ・インフィーネに関して、暗黒都市の指図は受けんよ」

慇懃な口調を取り去って、ユニヴェールは振り返った。

どうやら彼女のことはアルビオレックスの独断であるらしく、女王ヘレオーナル・ミュラの報告をした際には話題に出なかったのだ。

「芽は早めに摘むべきです」

「芽は咲かせなければつまらないだろう」

「そのために己が枯れることがあるかもしれませんが」

「それはない。私だからな」

淡々と断じた不滅の吸血鬼は、そこで話題をも断じた。

一拍置いて、訊く。

「陛下は、お前も、あの男のことをあの男が吸血鬼になる前から知っていたらどう？」

応えはない。

「アヴアルは異端の村。それが領主からヴァチカンに報告されるのは当たり前として、では領主には誰が情報を渡したのだろうか」

「さあ、誰でしょうね」

アルビオレックスの穏やかな目が、奥で笑う。

「そこまでして欲しいような器かね、レオナル・ミュラは」

「——陛下のお考えですから」

死人を魔物として甦らせることができるのは、神の特権ではない。神の怒り、女王の引き抜き、化け物吸血鬼の気まぐれ。

闇に狙われた者がその底なし沼から逃れることは難しい。

一介の雇われ騎士であつたミュラもまた、生身の人間であつた時からすでに首に縄をかけられていたのだ。暗黒都市は、彼の運命を神から奪い取つたのである。

……それとも、神が手を放したのか。

「ところでユニヴェール卿、彼らの居住区に礼拝堂を建てているそうですね」

「頼まれたものは造つてやらねばなるまい？ 何を信じようと私は構わんさ」

ユニヴェールは毒に満ちた冷貌で笑つた。

「肝心なところだけおとなしく従つていれば何をしようと奴らの勝手だ」

「そつといえば結局、彼らは暗黒都市に忠誠を誓つていませんでしたね」

「暗黒都市に忠誠を誓っている私に忠誠を誓っているんだから、似たようなものだろう」

「貴方は、」

白鳥の微笑が硬化する。

「そつやって自分の手駒を増やしていつか我々に反旗を翻すつもりでは？」

「まさか」

「実際に貴方は陛下の母上を滅ぼしている」

「私が死ぬ前の話だ。それに私は、反逆するとしてもひとりでやるさ。面倒臭くてちまちま手駒なんか増やしてられるか」

話を聞いているのかいないのか、アルビオレックスの双眸が紅蓮を灯す。

「もし本当に陛下に危害が及ぶことがあれば我々は――」

ユニヴェールは薄い笑みで彼の言葉を遮つた。

「滅ぼせるものなら、」

他の誰にも聞こえぬよう、低く歌うように。

「滅ぼしてみろ」

そして踵^{きびす}を返した吸血鬼は、立ち尽くす紅の魔物を背に靴音を響かせた。

揺らぐ黒衣はやがて、濃密な城の瘴気に紛れゆく。
赤い月の下、パールの森の奥。

T H E E N D

終（後書き）

用語：ブラン・ド・ノワール：現在では、黒ぶどうから作られる白
いシャンパンのこと。けっこう貴重。シャンパンは17世紀に生ま
れたそうなので、この話ではその意味はありません。

出展：ベルナールのお言葉要約 ジョルジュ・タート「十字軍」より
冷笑主義シリーズを知っておられる方：「ジエノサイド」より前の
話です。

執筆時BGM：

Audiomachine「Lachrimae」
Two Steps From Hell「To Glory」
Heart of Courage「Protectors o
f the Earth」
United We Stand、D
ivided We Fall」
City of the Fallen「Seraphim」
Clint Mansell「Requiem for a D
ream」
Veiger「Revelations」
PAIN feat. Anette Olzon「Follow
Me」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2281w/>

ブラン・ド・ノワール

2011年8月30日03時18分発行